にごり水

中川一之

三か月前人間ドッグに行ったときのことだった。

血圧が上が一六一、下が一〇一もあった。煙草を毎日一箱吸い、ほとんど毎日酒を飲み、昼は外食かコンビニ弁当という食生活のあらましを問診の五十がらみの男性医師に話すと、

「禁酒禁煙がまず必要ですね」

と黒縁の眼鏡の端に手をやりながら表情を変えずに言うので、これ以上話すことがいささか煩わしくなってしまった。

言われるまでもない。禁煙にトライしては挫折を繰り返してきた半生。毎週の業績報告会の度に煙草の本数が増える。その日のうさ晴らしのためについつい足を向けてしまう赤提灯。医師も意気地のなさを見通してか、一番簡単なことは水をたくさん飲むことですねと言った。血を薄めてやれば少しはましになるかもしれません。「本気で治す気がなかったら血管がボロボロになりますよ」

水をたくさん飲めば余分な塩分などが身体から抜けやすくなるらしい。

起床してマグカップ二杯の水を飲み、レギュラーコーヒーを二杯飲んで出勤。最寄り駅まで十分足らず歩くと尿意を催す。重たいと思ったが鞄にはペットボトルに三本の水を入れている。電車の中で一本飲み干すと三十分先の駅に着く頃にまた便所に駆け込みたくなる。おかげであちこちの駅の便所の場所に詳しくなった。

喫煙飲酒をしながらではあるが、そのうちに何とか血圧は下がり始め平常値ぎりぎりのところで落ち着いている。

水で健康が保たれるならば安上がりだ。スーパー、コンビニで売られているミネラル水の類に金をかけるのはばかばかしい、とレジに並ぶ客を嘲笑っているが、実は家の水にはたいそう金がかかっている。

死んだ義理の親父が遺した整水器の水を飲んでいる。酸とアルカリを分離する機能を持つらしい。あるとき訪問販売会社に勤めていた親戚が、兄さんお願いしますよと頭を下げて置いていった品で、義父はこれに二十枚近くの諭吉さんを支払っている。この高価な整水器のアルカリ水は煮炊きから、コーヒー、お茶、普段持ち歩く水にと

大活躍、十年選手のこれをもはや手放せない。
義父は糖尿病に伴う腎機能低下がもとで亡くなった。
煙草が片時も離せないスモーカーで、足に水が溜まって象の足のように腫れ上がっても、ベッドの上で胡坐をかいて、足をさすりながら、吸っていた。
学生時代全日本代表候補になったほどの俊足を誇ったラグビーの選手で、胸板は分厚くワイシャツを着ると盛り上がった胸のあたりの筋肉が強調されて、なかなかの男ぶりだった。
豪快で茶目っ気ある人で家族揃って焼肉屋に行くと一度に十人前ぐらい注文し、大皿に盛られたカルビを、バサッと網の上にぶちまけ、いたずらっ子のような笑みを浮かべて、箸で肉をかき混ぜながら「食べろ、食べろ、うまいぞ」と人に言い、色が変わったものからどんどんパクついていた。脳梗塞で入院し、左足が不自由になってからはさすがにそこまでの勢いはなくなった。
亡くなる二か月ほど前にどうしてもラーメンが食べたいというので一緒に行くと、背油が浮いた豚骨醤油ラーメンをぺろりと平らげスープまで飲もうとするので、びっくりした妻が「お父さん、ちょっとやめといた方がいいよ」とたしなめても「うまいんや」と言いながら、終いまで飲み干してしまった。
腎臓が弱り切り、もうあかんと病院に担ぎ込まれる前まで食事はちゃんと摂っていた。魚を食べるのが上手く、煮魚でも焼魚でも、器用に箸を操ってきれいに骨だけにしてしまう。好き嫌いなく、私がたまにつくる下手な料理でもうまいうまいと言って食べてくれた。
義父は煙草と食いしん坊が祟って死んだのだった。最後は腎不全だった。血液を入れ替えたが間に合わなかった。
妻は私が同じ道を辿っていると言って警告を発する。
「あなたも同じような死に方するわよ」
「義父さんの遺産があるから大丈夫だよ」
なんのこと？っていうように彼女は眉を顰めるので、私は整水器の方を指さした。最近少し働かせ過ぎているためか、先から水切れ悪くポタポタ滴が落ちている。
「そんなもの当てになるもんですか」
と妻はぴしりと言いながら整水器からマグカップになみなみ一杯注ぎゆっくりと飲み干すと、「先に寝るわよ」と上の階の寝室へ上がって行った。寝る前に飲むとお通じ

がいいと設置当初から続けている。

わが家のこの水は水道水と違ってカルキ臭さがなくてなんとなく丸みを帯びた味だ。美味いと言えば美味いし、そうでないと言えばそうじゃない。もとが味音痴なので偉そうなことは言えないが。

おいしい水はなんといっても新鮮な雪解け水だろう。

岩登りのために立山連峰の剱岳によく行く。長次郎雪渓は剱岳東面に位置する長大な急斜面の雪渓で、クライマーたちがこれから始まるスリリングな登攀を始める前にどうしてもここを登らなければならない。斜面の玄関口の脇に雪の表面が割れて取水できるところがあり、勢いよく落ちるそのしびれるほど冷えた天然水の爽やかでつるりとした喉越しの味わいといったらこの上ない。

若い頃、バイトをしては海外旅行によく出かけた。水が変われば腹をこわすと忠告され正露丸は必需品とばかりに鞄にしのばせたものだったが、胃腸だけは頑丈にできているらしくこの大衆薬の世話になったことは一度もなかった。

大学生のとき留学していたロンドンの水はカルシウム成分が多いせいで台所や洗面台は蛇口といわずシンクの隅や枠などあちこちにまるで瘡蓋のように白いものがへばり付いていた。見た目にも不衛生だし飲むとまずい。舌に刺さるものを感じた。

レストランでハンバーガーと水を注文すると、ウエイトレスが「水ですか」と怪訝な顔をする。「水だよ」と言い返し、変だなと思いながら食事をし終ってお会計を見るとなんと水代も含まれていた。

どうしたものかと同じクラスの日本人留学生に相談すると、紅茶を飲めと言う。面倒だというと「じゃあ水ボトルを買えばいい」と判り切ったことを言う。面倒なのでままよと水道水を生のまま飲んでいたが一年間の留学期間中、腹具合がおかしくなったのはビールを飲み過ぎた翌日ぐらいなものだった。

ＮＧＯの職員としてカンボジアに行くことになったときはそう呑気なことも言っていられなかった。

和平がなって総選挙が行われる二年前、カンボジアの北西部のタイ国境からほど近い一角で小規模だが溜池の補修など復興事業を担当し、月に一、二回タイ側から入国

したものだったが、事前にポラリスと呼ばれていた市販の飲料水をタイで一ダースほど買って持ち込まねばならなかった。

一帯の土壌は赤茶けたラテライト質で池や河川の水も同じような色合いに濁っており澄んだ色の水はどこにも見当たらなかった。

この地方の人々はため池の水を煮沸しないでそのまま飲んでいた。実地調査で幾村か巡回し家庭の水甕を見せてもらうと、中は近くのため池の水だった。濁った水が入っており異臭が鼻を突いた。細かな羽虫の死骸やゴミ、得体の知れない浮遊物が浮き沈みしている。その上澄みを掬って飲む。とても飲めたものじゃない。半世紀近く生きているが、飲み水だと言われた中で一番飲めそうにない水だった。

受け入れ側と言えば、タイ領内の難民キャンプで国連や各国のＮＧＯらの支援の下、農業、医療、機械修理などの訓練を受けて来たクメール人で構成された開発センターで、しっかりした英語やフランス語を話し専門知識に長けた実務能力の高い人もいた。

煮沸しないわけを尋ねると、

「その度に火を焚かなければいけないでしょう」とセンター長は言う。

「薪にする枝や木を集めるのも重労働なんです。木を伐ると森林破壊につながりますから難しいところです。だから雨水を貯めるよう教えていますがそれがなかなか。まず甕自体が不足しています。ため池の補修が終われば是非とも水甕支給の方でも援助願いたいものです」

このため池の水を飲んでしまったことがある。

コメの配給をしていたときのことである。

狭い農場に、百五、六十人の農民や避難民が集まり、大八車やそれを引いてきた水牛でごった返していた。

日差しは空が白く見えるほどカンカンに照りつけ、赤い大地に陽炎が立っていた。

風邪を引いてしまったのか、その日は朝から熱っぽく、軍用トラックのむわっとする幌の中で水ばかり飲んでいた。

ザックにはポラリスのボトルを二本入れてきたが一本は道中、飲み干してしまった。

我慢ならず二本目の口を開けようとすると手が滑ってトラックの上から落っことしてしまった。白いプラスチックのボトルはバシャッという鈍い音を立てて堅い地面の上でひしゃげてしまった。こぼれ出した水が黒々と染みを広げていく。

トラックの荷台から飛び降り、慌てて拾い上げたが間に合わなかった。陽射しにかざしてみるともう一口分くらいしか底に残っていなかった。

コメの配給作業を終えて宿舎に戻るまでに三時間以上かかる。それまでもたない。何か期待できるものがあるとすればスコールの雨水だったが、残念ながら空には一朶の雲すら見えなかった。

振り向くと古びた大八車の荷台に腰かけていた娘と目が合った。田舎娘にしては可愛らしい。肩まである黒髪、ふっくらとした顔つき、小さめの口。萌木色のクラマーを巻いた腰回りの肉付きからしてまだ二十歳にはなっていないように思われた。

水を落とし慌てふためいている私がおかしかったのだろうか。何やら柔らかな笑顔を浮かべていた。

何を思ったのか娘はふいに荷台から地面に降り立った。その拍子に薄汚れたTシャツの下で小ぶりな乳房がかすかに揺れた。荷台の前の方に回るとそこに結わえてあった古びた木箱から筒のようなものを取り出した。よく使いこまれた長い竹筒で、表面は手垢で黒ずみ角は丸みを帯びていた。

娘はよく日に焼けた小さな手でゆっくりと筒の蓋を開けると私に差しだした。中をのぞくとやはり彼女たちが飲んでいる水だった。

彼女はその竹筒を両の手で支え持ち濡れたように見える大きな目で真っ直ぐ私を見詰めている。

「どうぞ」

彼女の目は無言でそう伝えていた。

「ご厚意は有り難いんですが」と私は心の中で呟いた。

あたりがしんと静まったような気配を感じた。馭者台にいた父親らしい男が破れた麦藁帽の庇の下から暗い視線を投げかけているように見えた。車輪の陰に蛋白質欠乏症で下腹が膨れてしまった裸の幼児の怯えた表情。木陰に腰を下ろしているキンマで歯を黒くした老婆や染みだらけのTシャツを巻くって乳飲み子に乳首を含ませている女たち。疲れて澱んだいくつもの目が私に向けられていた。

仕方なく私は竹筒の口に固く閉じた唇を当て、飲んでいないのを気取られないように口の周りを両手で覆い、竹筒を傾けた。わざとらしく喉仏を一度また一度と上下させた。

僅かな量が唇の隙間から入り込み舌の上にざらついた味を残した。

「オックンチュラーン」と言って竹筒を彼女に返すと、彼女の表情に戸惑いとも微笑とも判別できない曖昧な影が通り過ぎたように見えた。

私は胸の前で手を合わせ感謝の意を示すお辞儀をすると、すぐさまトラックの荷台に飛び乗った。残っているポラリスの水で少しでも早く口を漱ぐのだ。工場で作られた都会の安全な水だ。間違いないだろう。

振り向くと彼女は配給の米を運んで来た母親に竹筒を手渡し、それを母親が飲もうとしているところだった。見たところ下手な猿芝居は観客の非難に晒されないようであった。

蛇口をひねると、ふとした時に異臭を放っていたあの竹筒の中の水を思い出す。にごっていたのは水ではなく、猿芝居を打った私の心でなかったかと。